Q-U を活用した、温かい学級づくりの研究

～不登校の未然防止・早期発見・早期対応に向けて～

宿毛市立片島中学校　　教諭　　林　　美枝
高知県心の教育センター　指導主事　西森　一彰

本研究では、子どもたちにとって温かい学級づくりを進めていくことが、不登校予防の基盤になると考えた。「楽しい学校生活を送るためのアンケート Q-U」（以下 Q-U）を活用し、学級の状態の把握、二次的支援（予防的支援）を必要としている生徒の抽出及び支援策の検討を行った。また、生徒の学校へ向かう力に注目し、「登校理由アンケート」を実施することで、生徒の登校を支える資源を明らかにし、支援策に活用した。学級や複数の生徒への支援策の検討を行うためにチーム支援会を実施し、その円滑な運営を目的として、チーム支援会シートを作成し活用した。これらの取組を通して、温かい学級づくりを目指したチーム支援の在り方を検証した。

キーワード　　不登校予防　　Q-U　　登校理由　　チーム支援会　　二次的支援

1　はじめに

「平成21年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(文部科学省)[1]によると、県内の小中学生の不登校児童生徒数は、前年度から 73 人少ない 775 人であった。そのうち、中学生は 619 人で、前年度より 45 人減少したが、35 人に１人が不登校という状況であり、依然として厳しい状況が続いている。高知県教育委員会では、本県の将来を担う子どもたちの学力や学習環境を保障し、いじめや不登校等の諸問題を改善するために、「学ぶ力を育み、心に寄りそう緊急プラン（第２次改定版)」（平成 22 年高知県教育委員会）を策定し、本県の喫緊の課題である、学力の向上、いじめや不登校の改善に取り組んでいる。

その具体的な方策の一つとして、子どもたちが落ち着いて安心して学べる環境づくりのために、Q-U を活用した「温かい学級づくり応援事業」を平成 20 年度から推進している。平成 21 年度、高知県心の教育センターが学級担任に対して実施した Q-U 活用調査によると、本県中学生の学級生活満足度調査の結果、学級生活満足群の生徒の割合は全国平均を上回っているが、非承認群の生徒の割合も、全国平均を上回っており、承認感が低い生徒の割合が高いことが分かった。学級の仲間や教師からの承認感の低い生徒は、学級での居場所を見出していない可能性が高いと考えられる。生徒が学級での居場所を見出せるようにすることが大切であり、そのためには温かい学級づくり、つまり生徒一人一人の安心感と満足感の高い学級づくりが必要である。

Q-U の開発者である河村(2004)は、「不登校の問題と学級崩壊の問題は連続している問題であり、教師はそれらを意識して学級経営に取り組む必要がある。しかし、学級集団のアセスメントは担任教師一人で行うことは難しく、Q-U の結果や、教師等からの情報を併せて、支援チームで検討することが必要である」と述べている[2]。本研究ではこのことをさらに進め、温かい学級づくりを目指して、Q-U を活用したチーム支援の在り方を研究し、不登校予防につなげたいと考え、研究課題を設定した。

2　研究目的

中学校における生徒の支援のニーズは多様化しており、学級担任等、教師一人の対応では抱えきれない現状がある。そこで、複数の教師がチームを組み、連携して対応することが必要である。近年不登校の問題においても、チーム支援の取組が行われているが、学校に登校できない状態になってしま

ってからの取組が多い。本研究では、不登校の問題が現れていない段階（未然防止）、あるいは問題の初期の段階（早期発見、早期対応）で対応するためのチーム支援会を組織し、不登校予防の基盤となる温かい学級づくりを目指したチーム支援の在り方を探ることを目的とする。

3　研究内容

(1)　不登校の予防と生徒の支援の在り方についての文献研究

ア　国の方針（魅力ある学校づくり）

文部科学省は、『今後の不登校への対応の在り方について（報告）』（平成 15 年）の中で、学校の取組について「学校における不登校への取組には、ややもすると児童生徒が不登校になってからの事後的な対応への偏りがあったのではないかという指摘も一部にあり、学校は、児童生徒が不登校とならない、児童生徒にとって魅力ある学校づくりを主体的に目指すことが重要である」と述べている[(3)]。そして、魅力ある学校づくりとは「児童生徒にとって、自己が大事にされている、認められている等の存在感が実感でき、かつ精神的な充実感の得られる『心の居場所』として、さらに、教師や友人との心の結び付きや信頼感の中で主体的な学びを進め、共同の活動を通して社会性を身に付ける『絆づくりの場』として、十分に機能する」学校づくりのことであると述べている[(3)]。また「すべての児童生徒にとって、学校を安心感・充実感の得られるいきいきとした活動の場とし、不登校の傾向が見え始めた児童生徒に対しても、不登校状態になることを抑止できる学校であることを目指すことが重要である」と述べている[(3)]。つまり、学校を児童生徒にとって魅力ある場とすることで、不登校になる前に予防しようという方針であると筆者は考えた。ここでいう魅力ある学校とは、児童生徒が、教師や友人とのかかわりの中で、自分の存在価値が十分に認められていると感じられ、登校への意欲が感じられる学校のことであると考える。

イ　学校における児童生徒支援体制

石隈（2005）は、学校心理学における児童生徒の援助について、学習面、心理・社会面、進路面、健康面の４つの領域と、児童生徒が求める援助の程度に応じて三段階に整理すると述べている[(4)]。表１は、その３つの段階を高知県心の教育センターの今西（2010）が整理し作成したものである。本研究では、一次的支援・二次的支援を中心にチーム支援を行うことを通して、不登校予防の基盤となる温かい学級づくりに取り組んだ。

表１　児童生徒支援をめぐる３つのレベル

支援のレベル	ねらい	主な対象	支援のポイント
一次的支援	発達促進･課題対応への支援	全ての子ども	すべての子どもを対象として、個々の発達を促す促進的支援と想定される課題への対応を促す予防的支援が中心となる。主に集団が対象となる。
二次的支援	早期発見･早期対応による予防的支援	一部の子ども	日常的なアセスメントをもとに、援助ニーズを抱えた一部の子どもをできるだけ早期に発見して早期に対応する予防的支援を行う。子どもが、自分で問題解決ができるように支援する。
三次的支援	問題対処への組織的支援	特定の子ども	困難な問題を抱えた特定の生徒を対象として、校内・校外連携による支援チームをつくり、危機介入を含めた継続的・組織的支援を行う。

ウ　登校理由アンケート

本間（2000）は、不登校の問題を、子どもたちが学校から離れる力（なぜ学校を回避するのか、子どもたちを学校から引き離すものは何か）だけでなく、学校へ向かう力（なぜ学校に行くのか、子どもたちを学校につなぎ止めているものは何か）を含めた包括的な視点から研究している[(5)]。

不登校誘発の要因を探り、それらの改善を目指すだけでなく、生徒の学校へ向かう力を見出すことで、不登校の予防ができるのではないかと考え、本研究でも、生徒の学校へ向かう力に着目し、登校理由を調査することとした。そして、この調査結果を、支援を要する生徒への支援策にも生かせると考えた。

アンケートは、久能・打矢（2001）の『学校魅力を規定する諸要因の調査研究（２）―ポジティブ・ウェイからみた不登校傾向を抑制する要因―』の中の、「実際に学校に行っている理由」を用いた[(6)]。久能・打矢は、本間の作成した質問項目に新たな項目を加え調査した結果を、因子分析し、表２のようにまとめている。本研究では、登校理由アンケートとして質問項目を表３のように25項目とし、４件法、記名式で行った。

表２　久能・打矢（2001）の登校理由に関する因子

第１因子	保護者期待	保護者から学校へ行くことを期待されており、学校へ行かないことは保護者を悲しませたり、心配をかけたりすることであると考えている
第２因子	自己能力向上・発揮	学校で自分の能力を発揮したり、向上させたりできると考えている
第３因子	社会通念	“行くことが当然だから”“あたりまえになっているから”“勉強しなければならないから”の３項目からなる
第４因子	自己基準	“高校に行くため”“将来のため”など自分なりの基準がある
第５因子	学業外学校魅力	行事や友達、部活など学校生活に関する興味や関心を理由とする
第６因子	生徒能動－保護者圧力	“保護者が行けと言うから”“保護者におこられるから”“なんとなく”の３項目からなる

表３　登校理由アンケートの質問項目

1	友だちとあえるから	10	行くことが当然だから	18	保護者を悲しませたくないから
2	保護者におこられるから	11	勉強したいから	19	自分の好きな勉強があるから
3	勉強がおくれるから	12	なんとなく	20	学校の中に自分の心の休まる場所があるから
4	行かないのは悪いことだから	13	あたりまえになっているから	21	楽しい行事があるから
5	学校が楽しいから	14	自分で何でもできる力をつけるため	22	自分の将来につながる勉強ができるから
6	将来のため	15	勉強しなければならないから	23	家ではできない体験ができるから
7	保護者が行けと言うから	16	みんなと差がつくから	24	新しいことに挑戦できるから
8	高校に行くため	17	保護者に心配をかけたくないから	25	部活が楽しいから
9	好きな人がいるから				

(2)　実態調査

ア　研究対象・アンケート実施時期

研究対象は、Ａ中学校第Ｂ学年の内の２学級である。Q-U は平成 22 年６月と 11 月、登校理由アンケートは平成 22 年７月と 11 月の２回実施した。

イ　Q-U

(ｱ)　１回目 Q-U の調査結果（６月）

Ｃ組の学級の状態は、学級生活満足群が 77％であり、全国平均と比べて多い。大半の生徒が学級生活に満足していると考えられる。学校生活意欲尺度では、学級の半数である 15 人が高意欲生徒群であり、低意欲生徒群は５人と、全体的に意欲の高い生徒が多い。

教師の観察からは、弱い立場の生徒に対して攻撃的な言葉を発するインフォーマルなリーダーの存在が指摘された。大半の生徒が学級生活満足群にいる中で、学級生活不満足群の２人の生徒は、より深刻な状況が考えられ、不登校になる可能性が心配された。

Ｄ組の学級の状態は、学級生活満足群が 59％、非承認群が 21％であり、どちらも全国平均と比べて多い。これは高知県の傾向と同じである。学校生活意欲尺度では、高意欲生徒群が 18 人であり、低意欲生徒群は６人と、全体的に意欲の高い生徒が多い。「学習意欲」と「学級との関係」は全国平均を上回っている。

教師の観察からも、何事にも真面目に取り組める生徒が多く、学級全体で楽しもうとすることがある一方、自分勝手な言動で授業妨害をする生徒がいることが課題として挙げられた。

(ｲ)　支援の方針

１回目Q-Uの結果から、温かい学級づくりに向けて、１学期に取り組むべき学級への全体指導について考えた。学級生活満足度尺度では、「クラスの中で認められた経験が少ない」や「先生に認められた経験が少ない」と感じている生徒が多く、学校生活意欲尺度では「教師との関係」がやや低いという結果を踏まえ、生徒の承認感を高め、教師とのリレーションを確立するために「小さなことでも褒める」という取組を提案した。

河村は「学級が教育力のある集団になるためには、ルールとリレーションという２つの要素が学級内に同時に確立していることが必要条件である」と述べている[7]。ルールの定着は学級内の対人関係のトラブルを減少させ、子どもたちに安心感を与え、友人との交流も促進される。リレーションとは互いに構えのない、ふれあいのある本音の感情交流がある状態のことであり、リレーションの確立が仲間意識を生み、協力的で活発な集団づくりにつながる。

Ａ中学校第Ｂ学年においては、学習規律等ルールの確立に向けての取組は行われており、この取組は継続しながらも、教師と生徒とのリレーションを確立することが必要であると感じた。そして２学期からは、ルールとリレーションの確立を目指して、構成的グループエンカウンター（以下SGE）を学級の実態に応じて実施することにした。

(ｳ)　個別支援対象生徒の抽出について

不登校を予防するにあたって、学級生活不満足群（特に要支援群）の生徒は学校・学級生活に不適応になっている可能性が高く、不登校になる可能性が高いと考えられる。また、学級生活満足度尺度の 19 番の質問項目「学校に行きたくないときがある」はヘルプシグナルであり、何らかの理由により学校へ向かう力が弱くなっていると考えられることから、この質問項目に注目した。19 番の質問項目に高得点（５もしくは４）を付けている生徒が、なぜそのように感じているかを探ることが、支援の糸口になるのではないかと考えた。また、その生徒の他の質問項目を検討することで、生徒の自助資源や課題が明らかになり、支援策に生かせると考えた。

19 番の質問項目に高得点を選んだ生徒及び、教師による行動観察や教師との面接の中で気になる生徒の中から、個別支援の対象を決定した。

ウ　１回目登校理由アンケート結果

(ｱ)　学年全体の傾向

表４は、登校理由アンケートの学年全体の傾向をまとめたものである。

学年全体の傾向としては、「友達とあえるから」（「学業外学校魅力」）が最も高く、続いて「将来のため」「高校に行くため」（「自己基準」）という結果になっている。次に「行くことが当然だから」「あたりまえになっているから」「勉強しなければならないから」という「社会通念」の３項目すべてが同じ平均値で並ぶという結果から、Ａ中学校第Ｂ学年の生徒にとっては学校に行き、勉強することは常識だとする生徒が多いと考えられる。

平均値が低かった質問項目としては、「保護者におこられるから」「保護者が行けというから」があり、「保護者圧力」はあまり受けていない傾向がうかがえる。また「好きな人がいるから」という項目も低いが、これについて小出・高橋・鵜養（2007）は「中学生にとっては、“好きな人”という表現は異性との関係を表す言葉と受け取られ、記名式の調査において、思春期の生徒の評価得点が低くなったと思われる」と述べており[(8)]、本調査においても同じことが言えるのではないだろうか。

表４　登校理由アンケート学年集計結果（59 人）

高い順	質問項目	平均	領域別登校理由
1	友達とあえるから	３．７	学業外学校魅力
2	将来のため	３．６	自己基準
2	高校に行くため	３．６	自己基準
4	行くことが当然だから	３．５	社会通念
4	あたりまえになっているから	３．５	社会通念
4	勉強しなければならないから	３．５	社会通念

低い順	質問項目	平均	領域別登校理由
1	保護者におこられるから	１．８	保護者圧力
2	保護者が行けというから	２．２	保護者圧力
2	好きな人がいるから	２．２	学業外学校魅力

(ｲ)　Q-U で「学校へ行きたくないときがある」と答えていた生徒の傾向

表５は Q-U で「学校へ行きたくないときがある」と答えていた生徒の傾向をまとめたものである。これを見ると、「高校にいくため」「みんなと差がつくから」「将来のため」（「自己基準」）、「あたりまえになっているから」（「社会通念」）、「友達とあえるから」（「学業外学校魅力」）という順になっており、「自己基準」「社会通念」が「学業外学校魅力」よりも高い得点になる傾向が分かった。

本間は、「欠席願望を抑制する要因として『友達とあえるから』等『学校魅力』が大きな影響を与える」ことを指摘している[(9)]。このことは学年全体の結果からも同様の傾向がうかがえる。一方、Q-U で「学校へ行きたくないときがある」と答えていた生徒の登校理由では「自己基準」が高く「友達とあえるから」が学年全体ほど高くないことから、学校へ行きたくない気持ちを抑えて学校へ向かわせている力は、高校進学という「自己基準」が強いと言える。この結果から、学校は楽しいから行くのではなく、行くことが将来役に立つと考えて登校している傾向が強いのではないかと思われる。

個別支援では、支援が必要とされるそれぞれの生徒の登校理由を抜き出し、支援策に活用した。その部分を強化すれば、支援が必要とされる生徒にとって、心の休まる場所等の居場所ができ、その生徒にとって少しでも魅力ある学校に近付けるのではないかと考えた。

表５　Q-U で 19 番の質問項目「学校へ行きたくないときがある」と答えていた生徒（９人）の結果

高い順	質問項目	平均	領域別登校理由
1	高校に行くため	３．７	自己基準
2	みんなと差がつくから	３．５	自己基準
3	将来のため	３．４	自己基準
3	あたりまえになっているから	３．４	社会通念
5	友達とあえるから	３．３	学業外学校魅力
5	勉強しなければならないから	３．３	社会通念

低い順	質問項目	平均	領域別登校理由
1	保護者におこられるから	２．０	保護者圧力
2	好きな人がいるから	２．４	学業外学校魅力
3	学校が楽しいから	２．５	学業外学校魅力

エ　教師からの聞き取り及び生徒の行動観察

学校、学級の雰囲気をより深く理解し、生徒の状態や支援策の実施状況を知るために、学級担任等との情報交換・生徒の行動観察を、Ａ中学校において７回行った。教師からの聞き取りでは、まず学級担任から、現在の学級の課題と、その解決に向けての取組や学級の良い点を聞き取った。また、個々の生徒について、学級のフォーマルリーダー、インフォーマルリーダーの様子や、家庭環境や友人関係等について、小学校からの引き継ぎ事項を含め、様々な教師の視点からの情報を得るよう努めた。特に、養護教諭からの「不登校や連続して欠席する生徒はいないが、友人関係での悩みから、女子生徒に保健室への来室が多い」という状況分析は注目すべきものと感じた。

学級活動や授業中、休み時間、給食等の場面において生徒にかかわりながら、学級の雰囲気や班活動の様子、支援が必要と考えている生徒についての行動観察を行った。

(3)　実践研究　（チーム支援会）

ア　構成　７名

チーム援助の提唱者である石隈は、「中学校で支援を必要としている子どもたちへの、二次的援助サービスのニーズは極めて高いものがあり、そこで、ケースごとにその都度特別なチームを編成するよりも、日ごろからの学年を母体としたチームを編成する方が実際的である」と述べている[(4)]。そこで本研究においても、学年を中心に支援チームを構成した。構成メンバーは、学級担任（２名）・副担任（２名）・養護教諭・管理職とコーディネーター（筆者）の７名である。

イ　実施日…毎月１回のペースで計５回行った。

１学期　平成 22 年７月７日　　夏季休業　平成 22 年８月 23 日

２学期　平成 22 年９月 29 日・10 月 21 日・11 月 12 日

ウ　チーム支援会シートの作成と活用

チーム支援会は、生徒の情報を共有し、支援者（教師）の役割分担を明確にし、支援の方向性を決定する場である。しかし、多忙な学校現場では時間の確保が難しく、継続してチーム支援会を行うためには、短時間で効率よく進める工夫が必要である。そこで、限られた時間の中でいかに効率よくチーム支援会を行うかを考え、チーム支援会シート（表８）を作成した。細かく時間配分し、個別支援では特に心配な生徒に絞り、「だれが、いつ、何を」支援していくのかという具体的な支援策（Plan）と、実際の取組（Do）も記入できるように工夫した。チーム支援会シートを活用するにあたり、まずチーム支援会のタイムスケジュールをメンバーに提示し、タイマーで時間を計りながら進行した。具体的な流れは各学級の気になる生徒についての情報交換５分、個別支援の必要な生徒について 20 分、全体指導の方針について 15 分、チーム支援会の振り返りで

計画した。

気になる生徒についての情報交換後、個別支援を要する生徒を３名程度に絞り、具体的な支援策について検討を行った。その際コーディネーター（筆者）が、Q-U及び登校理由アンケートから考えられる支援策を資料として提示した。そして、検討した支援策をチーム支援会シートに記入し、次回のチーム支援会で取組状況を確認するようにした。

表６　チーム支援会シート

チームが元気になる　チーム支援会シート

日時　：　2010 年（　）月（　）日
参加者：〔　　〕

組 気になる生徒 （５分）			
個別支援 （２０分）	名前	Plan　取り組むこと （だれが・いつ・何を）	Do　実際の取組 （できたこと・できなかったこと）
	1		
	2		
	3		
全体指導 （１０分）			
その他			

エ　「チーム支援会」の記録

表７　チーム支援会

第１回	
全体指導	《支援策》１学期は残り少ないため、生徒の承認感を高め、教師とのリレーションを育てるために、「小さなことでも褒める」という取組を提案した。
個別支援	学級生活満足度尺度の質問項目19番「学校に行きたくないときがある」で高得点を選んだ生徒を中心に支援の必要な生徒の抽出を行った。 Ｃ組：教師の観察より３名を加え、計５名の生徒を抽出した。 Ｄ組：７名のうち、１名は心配ないということで６名の生徒を抽出した。
所感	情報交換の中で、先生方が生徒一人ひとりを大切にして、熱心に取り組んでいることや、先生同士の人間関係も良好であると感じた。初めてのチーム支援会で、自分なりにしっかり計画を立てたつもりであったが、予定時間をオーバーしてしまった。次回は時間配分等計画的に行い、多忙な先生方が元気になり、そのことが生徒に反映されるような会にしたい。
第２回	
全体指導	《支援策の実施状況》朝読書や係り活動等、当たり前にできていることを褒めた。 《現状》Ｃ組：弱い立場の生徒を守る取組をした。Ｄ組：ルールの定着に向け、注意することが多かった。 《今後の支援策》 Ｃ組：仲の良い者同士、メンバーが固定しないよう班づくりをくじ引きで行う。 Ｄ組：注意することより褒めていく。 学年：①学校行事（体育祭）を軸にして、学級づくりを行う。②SGE を行い、教師や友人との人間関係づくりに取り組む。③インフォーマルなリーダーを取り巻く第２集団を、認めて伸ばす。④生活の中で、人に迷惑を掛けたら「ごめんなさい」「すみません」という素直な気持ちを身に付けさせる。
個別支援	《個別支援で取り組むこと》６名について支援策の検討を行う。
所感	個別支援では、特に心配な生徒について「だれが、いつ、何を」支援していくかという、より具体的な内容について検討することができた。全体指導では、学年主任から２学期の取組についての提案があり、方向をはっきりと定めることができた。

第３回	
全体指導	Ｃ組：班によっては授業中私語があり、班員同士もめていたりした。 Ｄ組：できたことを褒めている。 学年：前回決定した取組は実施できたが、うまくいかないものもあった。 ①体育祭の取組ではあまりまとまることができなかった。 ②SGEは「一夏の経験」を自己開示しながら楽しくできた。③気を付けて褒め、うまくいっていたが、不公平だと言う生徒がいる。④身に付けさせるよう、その都度声を掛け指導している。 《今後の支援策》①学校行事（文化祭　合唱コンクール）を軸にして、学級づくりを行う。 ②SGE を行い、教師や友人との人間関係づくりをする。
個別支援	
所感	新たな支援対象の生徒に予想外の名前が挙がり動揺した。また、気になる生徒に対して、担任だけでなく他の教師がパイプ役となり話を聞いたり、保護者への対応をしたりと、チームでかかわっていることがうかがえた。部活動では、教師同士の連携ができており、チーム支援会の目的である複数での対応がうまく機能していることを感じた。会の進め方では、複数の生徒について話し合うため、時間がオーバーしてしまう。短時間で収めるためには、もっと発言の内容を絞るべきであり、コーディネーターの役割の難しさを感じた。
第４回	
全体指導	①学校行事を軸にして学級づくりを行うという取組の中で、文化祭についての報告があった。インフォーマルリーダーと考えられる生徒を、合唱コンクールのリーダーとし、公的なリーダーシップを発揮できる機会を与えることで学級への所属感を高めたり、学級全体で協力することの喜びを感じさせたりするための取組がなされていた。②SGEは、「新聞パズル」を実施した。できそうな班が苦戦するという逆転があり集中して協力できていて良かった。 《今後の支援策》①リレーションを深める。 ②期末テストに向けての取組を行う。 ③SGEを実施する。 ④「総合的な学習の時間」における地域学習の中で、グループでの活動を通して仲間づくりを行う。
個別支援	
所感	個別支援の対象者に、教師に反抗的な生徒が挙げられたことで、少し方向性が変化してきたことを感じた。生徒指導等でチーム支援会を予定していた時間に始めることは難しく、必然的に終了時間も18時を過ぎてしまった。中間テストや部活動の大会の準備のある中、日程の調整は大きな課題である。
第５回	
全体指導	《今後の支援策》 ①自分と学級の成長を確認させる。②SGEを実施する。
個別支援	個別支援については、Q-U から見られる結果と、日常の観察から、これまでの取組を振り返りながら、それぞれの生徒の今後の課題や取組について話し合った。
所感	２回目の Q-U の結果より、これまでのチーム支援会で名前の挙がったすべての生徒について話し合うことができた。

4　結果及び考察

(1)　各学級の Q-U（学級生活満足度尺度）の変化

Ｃ組は、１回目と２回目の Q-U の学級満足度尺度の結果を比較すると、プロットの状態がやや横に伸びた形になっている。１回目の Q-U の結果では、要支援群や学級生活不満足群に属していた生徒については、チーム支援会において検討した支援の取組等により、承認得点の上昇、被侵害得点の低下が見られた。

学級生活満足度尺度においては、「勉強や運動などで友人から認められている」「自分を頼りにしてくれている友人がいる」「何かしようとする時協力してくれる友人がいる」等、友人に関する質問項目に対して、他の質問項目とよりも高い得点を付けている。また、学校生活意欲尺度においても、「友人との関係」のカテゴリーが、他のカテゴリーと比較して高い得点であった。

温かい学級づくりに向けて、多くの友人とかかわることを目指して、くじ引きでの班替えやSGE、日々の生活の中で、人に迷惑を掛けたら謝ることを身に付けさせるソーシャルスキルトレーニング等を検討し取り組んだ。また、日頃から弱い立場の生徒を守ることを目指した取組を行った。これらの支援策は、まだまだ十分ではないにしても、前述のQ-Uの結果や登校理由アンケートにおける「友達とあえるから」という登校理由についての得点が上昇していることから、友人との人間関係づくりにはある一定の効果があったと思われる。そして、学級生活満足度尺度の質問項目19番「学校に行きたくないと思うことがある」について、他の質問項目と比較して低い得点を付けていることや、現段階で30日以上の欠席者が0であること等を考えると、C組への取組が不登校予防の一助となったと思われる。

D組は、非承認群は増加しているが、侵害行為認知群はいなくなっており、他の群にはあまり変化がなかった。

１回目と２回目の学校生活意欲尺度を比較すると、「教師との関係」のカテゴリーが、その他のカテゴリーに比べ、大きく低下している。チーム支援会では、学級全体に対しては、承認得点の低い生徒を中心に、教師とのリレーションを高めるために、小さなことでも声を掛け褒めるという支援策を決定したのであるが、実際には、チーム支援会での現状報告から、ルールの定着を優先し注意する場面が多く、当初の目的であった教師とのリレーションを高めることにつながらなかったと思われる。

また、二次的な支援が必要とされる生徒に対して、支援策を検討したのであるが、実際に生徒と対応する場面では、問題行動等に対応することが必要となり、チーム支援会において支援策を検討した生徒や学級全体への取組に時間を掛けることや、エネルギーを十分に注ぐことができなかったのかもしれない。そのことによって、かかわりが少なくなった生徒の中には、教師からのかかわりを求め、教師との関係低下をまねいた生徒もいたのではないだろうか。その中で、学級生活満足度尺度の項目において、「勉強や運動などで認められていない」と感じている生徒が増え、その反面「みんなから注目をされる」「自分の意見がクラスの意見になる」と感じている生徒が増えている。このことは、良い意味での注目であり、良い意味での自分の意見が取り上げられた経験と考えてよいのだろうか。今後、さらなる行動観察から検討することが課題である。

(2)　チーム支援会について

筆者は、本研究において、チーム支援会をコーディネートする役割（以下コーディネーター）として取り組んだ。コーディネーターとして、チーム支援会のメンバー（支援者）同士の心をつなぐことが、チームワークを強くし、チームで生徒を支えるためにも大切であると考えた。しかし、筆者は月に１回程度しか学校に入らないことや、チーム支援会の支援者が初対面ということもあり、支援者同士をつなぐためには、支援者である教師一人一人を理解し、支援者とコーディネーターがつながることが前提ではないかと考えた。

そこで、学校に入った際には、筆者を知ってもらうとともに、相手のことを知るためにできるだけ機会を見付けて話をするようにした。そのとき、筆者が話をするよりも、支援者の話を聴く時間を多くするように心掛けた。チーム支援会のメンバーの中には、養護教諭以外に１名女性の教師がいた。その教師との話の中では、筆者が以前抱えていたような、授業での悩みや生徒への対応にかかわる悩みがあり相通じるものを感じた。同性であることも相まって、しだいに話をする機会が増

え、近づくことができたように感じた。その後この女性教師は、チーム支援会において支援の必要な女子生徒に対する支援策にかかわり、担任の思いを女子生徒に伝える等、学級担任と女子生徒をつなぐ役割を担当した。

チーム支援会を計画どおりに進めていく上で、学年主任の存在はとても大きかったと感じている。期日の設定はもちろん、発言する時には言葉を精選し、現状を客観的に見つめた上で、学級や生徒への支援策を提案した。コーディネーターからの提案も肯定的に受け入れる等、日ごろから人を尊重している雰囲気が伝わってきた。筆者もコーディネーターとして、チーム支援会では自由に発言できる雰囲気を大切にしたが、この学年主任のメンバーへの接し方が大きな助けになったと思う。このチーム支援会や学年の雰囲気が、先の女性教師やそれぞれの教師の持ち味を活かした生徒への支援につながったと思われる。

また、筆者はチーム支援会の進行役として、時間と検討事項等支援会の内容を調整するとともに、全員が意見を出せるように心掛けた。そのために活用したチーム支援会シートは、資料を１枚にまとめることで、時間短縮に役立つとともに、メンバーが取組を振り返ることによって新たな気付きが生まれた。チーム支援会後のメンバーからは、「情報交換が生徒理解の共有になった。普段からの話し合いが大切だと感じた」「他の先生方からの生徒の見方や支援策を聞いていると『そうなのか』『なるほどそういう見方もあるのか』と様々な視点からの見方が大切だ」「子どもたちのできているところや良いところを評価することを忘れないようにしなければならないと感じた」等の感想が寄せられた。

このようなチーム支援会のメンバーの気付きからは、複数のメンバーからの意見を聴くことによって、生徒を様々な視点や見方から総合的に理解することができ、それが生徒理解の変化につながったと思われる。そして、これらの教師からの様々な見方に加え、Q-U や登校理由アンケート等から、生徒を支える資源に焦点を当てた支援策を検討したことによって、より深い生徒理解に結び付くものとなったのではないかと感じた。しかし、本論文を執筆する中で、チーム支援会でのコーディネーターとしてのかかわりについて振り返ってみると、生徒理解について、生徒の言動や態度、アンケート結果等目に見える部分から、生徒を理解し支援策を検討しようとする面が強かったのではないだろうかと考えた。そして、生徒の言動や態度等の表層だけでなく、その背景や内面も含め、生徒の心の中の様子を理解しかかわろうとすることが課題であろう。

5　成果と課題

これまで私は、不登校予防の基盤となる温かい学級づくりを目指し、チーム支援会をコーディネートする立場で取り組んできた。学年会を活用することで、生徒の情報や支援の方向性を共有しやすく、具体的な支援につながることが分かった。

それらの支援策を振り返ってみると、すべての生徒を対象にした人間関係づくりの取組等の一次的支援に加え、その集団を構成する個々の生徒に焦点を当て、その生徒の Q-U と登校理由アンケートの結果から得られた自助資源を強化する支援策を行った。そして、これらの二次的支援の有効性を、不登校予防の一つの在り方として提案することができた。

また、その二次的支援によって、支援を必要としている生徒の自助資源を伸ばす取組は、周りの生徒にとっても支援を必要としている生徒を認めることにつながり、温かい学級づくりに向けた一次的支援となったと考えられる。

課題としては、本研究では、二次的支援を必要とする生徒に対して、Q-U と登校理由アンケートの結果から支援策を検討し、実践的研究を進めた。しかし、生徒が教師の支援をどう感じているのか等、生徒の支援のニーズを的確に把握できていない可能性が考えられた。今後は、支援対象の生徒とのかかわりを通して、生徒を支援の対象とするだけでなく、支援チームの一員として位置付け、生徒のニ

ーズを把握できるチーム支援の在り方を検討する必要があると考える。

6　おわりに

研究を始めたころ、筑波大学の石隈教授の講演で、「チームが元気になる支援会にしよう」という話をお聴きした。心身の変化が著しい思春期の生徒と毎日向き合う中で、中学校教師にとって、いつも元気でいることはとても難しい現状がある。生徒のことを話し合うことで、教師が元気になるために少しでも役に立てばという思いから、それがチーム支援会の目標になった。目標は十分に達成できたとは言えないかもしれないが、いつも笑いに包まれる場面は持つことができた。実際にチーム支援会を行ってみると、予定時間を越えることが多く、コーディネーターとして反省点は残る。しかし、気が付けば時間が経っていたという感じであり、生徒について話すことは疲労感が少ないことに気付いた。やはり、問題が起きてからではなく、予防的な視点でのチーム支援会は大切であると感じた。

「チームが元気になる支援会」―それは、明日への活力を生む内容であると考える。チーム支援会で名前の挙げられる生徒は、少なからず問題を抱えている生徒である。それらの問題を解決するための支援策が話題の中心に上るが、生徒の情報交換を行う際に、生徒の良い変化を報告する、あるいは良い行動を褒めることによって、メンバーが元気になることを感じたのである。チーム支援会の良い点は、複数のメンバーで生徒の現状を伝え合うことによって、自分が気付かなかった生徒の一面を知ることでもあると思われる。日々の生徒とのかかわりの中で、行き詰まりを感じている時、他のメンバーからの情報によって生徒の見方が変わり、気持ちを切り替えていく。それが明日への活力につながるのである。そのためには、教師は褒めるための材料を見付ける観察力を磨かなければならない。

本研究を進めるにあたり、仲間の温かさを強く感じることができた。多忙な中、チーム支援会の期日を調整し、毎回熱心に話し合ってくださった研究協力校の校長先生はじめ、チームの先生方及びいつも温かく迎えてくださった教職員の皆様に、紙面をもって謝辞を伝えたい。

【引用文献】

(1)「平成 21 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」p. 12　文部科学省、平成 22 年
(2)河村茂雄・小野寺正己ほか『Q-U による学級経営スーパーバイズ・ガイド』p. 34-35　図書文化、2004
(3)「今後の不登校への対応の在り方について（報告)」p. 13　文部科学省、2003
(4)石隈利紀・山口豊一・田村節子『チーム援助で子どもとのかかわりが変わる』p. 28-29　ほんの森出版、2005
(5)本間友巳「中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析」p. 32-33　教育心理学研究、2000
(6)久能弘道・打矢美由紀「学校魅力を規定する諸要因の調査研究（２）―ポジティブ・ウェイからみた不登校傾向を抑制する要因―」p. 222-223　北海道教育大学紀要（教育科学編)、2001
(7) 河村茂雄・小野寺正己ほか『Q-U による学級経営スーパーバイズ・ガイド』p. 42-43　図書文化、2004
(8)小出ひろ美・高橋美枝・鵜養美昭「登校理由と学校好き感情についての一考察」p. 114　日本女子大学人間社会研究科紀要、2007
(9) 本間友巳「中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析」p. 32　教育心理学研究、2000

【参考文献】

・「平成 21 年度温かい学級づくり応援事業報告書」高知県心の教育センター、平成 22 年
・「学ぶ力を育み心に寄り添う緊急プラン【第２次改定版】」高知県教育委員会、平成 22 年
・河村茂雄・粕谷貴志ほか『Q-U 式学級づくり　中学校―脱中１ギャップ「満足型学級」育成の 12 か月』図書文化、2008
・石隈利紀・田村節子『石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門―学校心理学・実践編―』図書文化、2003
・小林正幸『先生のための不登校の予防と再登校援助』ほんの森出版、2002
・小林正幸『学校でしかできない不登校支援と未然防止』東洋館出版、2009

・山口豊一・吉田香衣・石川章子「中学校教師のチーム援助モチベーションに関する研究―インタビューを題材とした質的研究―」跡見学園女子大学文学部紀要、2009
・石隈利紀「学校を変える子どもたち～ひとりの援助がみんなの援助～」日本学校心理学会第 10 回大会記念講演録、2009